

## のびのびと息ができる社会

参加型システム研究所理事長 神奈川大学名誉教授 後藤 仁

独善を慎んで、独裁を進める。安倍政権は、民主主義にとって、大きな危険性を秘めている。しかし、主権者市民は、民主主義を守り抜く。そう、私は確信している。

### 世論との均衡

経済・エネルギー政策。外交・防衛政策。教育・情報政策。この三つの政策領域について、総合的、統合的に、いわば右傾化を推し進めているのが、安倍政権の特徴である。しかし、一斉化、画一化は求めている。政策間にデコボコがあっている。

世論の動向を見極め、その限界ギリギリの手前で、均衡を図る。決して無理はしない。しかし、できることは断固としてやってしまう。

こうなれば、こうする。こうすれば、こうなる。コンティンジェンシー（contingency）を考慮に入れ、シミュレーションを行う。安倍政権は、現代の新しい兵法を古来からの兵法に組み合わせている。

各政策に工程表を用意し、状況の変化に応じて柔軟に運用し、政策間に優先順位とメリハリをつけなおす。

今回の解散総選挙にしても、安倍政権は、その土俵とタイミングを自ら選んでいる。ぬきうちとか、電撃とか言われているが、常在戦場ということを野党側は失念していたという他ない。

選挙結果は、安倍政権の思惑通りになった。各政策について、これまでのところは合格ということになり、各々を一層前へ進めることも許された。フリーハンドにこれまでのことが認められた。ともかく、安倍政権にとっては大成功となった。

### 世間への同調

世論の支持を得て右派政権が成立し、続いていくことは非難すべきことではない。問題は、民主主義の契機が弱いことである。端的に言えば、政権交代ということは、右派のイデオロギーの中で、弱々しい位置しか占めていないのである。世論との均衡を図るが、世論を操作する権力は、あくまで右派が握り続ける。そのためには、ときに無理な力を用いるのも辞さない。この点で、安倍政権はいささかいかわしいものである。

とくに教育の領域は、心配である。戦争は、兵士を必要とする。兵士は従順でなければならない。お上の言うことには、おとなしく従う兵士の予備軍を、学校と、地域、職場に、普段から養成しておかなければならない。子どもの頃からの教育が何よりも大切である。世間のきまりに対して、疑問を抱くことなく、従う子どもを育てなければならないのである。

日本の教育界では、すでにそうした風潮が蔓延している。

教育界だけでなく、社会全体に、異論に対する圧迫が蔓延しており、息苦しさが増しているのである。

### 相手の最良の姿を尊重

相手をおとしめて、自分を評価してもらおうとする。それは、卑怯である。民主主義の原点は、相手の尊重である。言論上での勝負においては、相手の主張をなるべく多く包摂できるほうが、勝ちになる。とりあえずの主張の欠点は、見つかっても、それをやりこめるのではなく、おぎなう。相手の議論を補正し、その最良の姿を描き出し、それとの比較で、自らの主張を高めていく。このような勝負に勝った割合の、多かったところが、多数派になる。その過程で、少数派も十分尊重されるのである。

真理と正義は独占できない。真理と正義においても、多様性の原理は貫かれている。多様なものの共存、多様なもの同士の勝負のルール。それを見い出していくことが、現代社会の課題である。

日本社会を構成する市民は、この課題に挑戦する資格と力量をもっている。私は、いまだにそう確信している。自由闊達が一番。市民ひとりひとりの創意工夫が活かないようでは、経済の発展は不可能である。市民にとっての価値も生まれない。十人十色、一人十色がいいのである。

市民は、コセコセ、ビクビクと世間にこびるのではなく、のびのび、すくすく、自ら育っていくことを望んでいるのである。

（ごとうひとし）